# 努力事項解説 その6 （小学校音楽）

**児童が思いや意図をもって音楽表現したり、じっくりと音楽のよさや面白さを味わう学習過程を組織し、そのプロセスにおいて児童一人一人のよい点や成長の状況などを積極的に評価し、指導に生かしましょう。**

## 児童が思いや意図をもって音楽表現したり、とは

児童一人一人が、
「自分はこのように歌いたい。」とか、
「この曲はこのように歌えばこの曲のよさや面白さが表現できる。だから自分はこのように歌いたい。」
というような、児童自身の考えで音楽活動をさせるということです。決して、やらされての音楽活動にならないようにしましょう。

音楽は本来、自発的に取り組む芸術です。やりなさいと言われて仕方なく歌わされたり、演奏させられたりするものではありません。以下のような手立てを用いて児童に思いや意図をもたせて音楽活動を行わせましょう。

○ **音楽を形づくっている要素を聴き取り、それらの働きが生み出すよさや面白さを感じ取る活動を積極的に行いましょう。**

これから取り組もうとする楽曲に出会わせるときに、その曲のよさや面白さがどういうところにあるのか、楽曲を繰り返し聴かせたり、歌詞を朗読したりして、**考えさせ、話し合わせ、気付かせましょう。（これが音楽科における思考の場面のひとつです。）**それぞれの楽曲には、それぞれのよさや面白さがあります。それが何なのか、そして、なぜそのようなよさや面白さがあるのか、音楽を形づくっている要素と関連させて話し合わせて、楽曲のよさや面白さに気付かせましょう。

○ **聴き取り、感じ取ったことを表現に生かすようにしましょう。**

聴き取り、感じ取ることで、音楽の要素と楽曲のよさや面白さの関係に気付いたら、それを表現に生かすようにしましょう。
例えば、行進曲等でリズムの働きがその楽曲のよさや面白さの中心になっていることを聴き取り、感じ取ったら、**それを生かして表現するためにはどうすればいいか、考えさせましょう。（これが音楽科における思考、判断の場面のひとつです。）**児童が自分なりに考えて、例えば、

「歌詞や旋律の動きからすると、４段目がこの曲の山だと思う。」
だから
「４段目を他のところより強く歌うと、この曲のよさが出せると思う。」
「４段目を大きくたっぷりと歌いたい。」
などの思いを持たせるよう指導し、**それを言葉（身体の動き、絵や図などを含みます。）、で表現させましょう。（これが音楽科における、思考、判断、表現の中の表現の場面です。音楽を表現することではありません。詳しくは、第2観点を解説した11月1日にアップしたページを参照してください。）**
**これらは、楽曲を聴いて聴き取り、感じ取ったことを表現に生かそうという思いや意図をもった児童の姿です。**

○　自分の思いや意図どおりに表現できたかどうか、児童自身に判断させる機会を設定しましょう。

　自分で「こう歌いたい。」「このように演奏したい。」という思いや意図をもち、その実現を目指して音楽活動をしたら、実際にそれができたかどうかを、児童自身に判断させる機会をつくりましょう。教師がそれを判断することは当然必要ですが、その前に、児童がそれを判断することで、意図どおりできていれば満足感、成就感を味わうことができるでしょうし、できていなければ、フィードバックして繰り返し練習したり、教師が支援してできるようにするする場面です。
　また、児童が満足しても教師が満足できる段階まで達していないと判断されれば、教師が指導をしていきましょう。

## じっくりと音楽のよさや面白さを味わう学習過程を組織したりして、とは

　鑑賞の授業では、特に長い曲の場合など、楽曲の一部分を繰り返し聴かせることがよく行われます。ねらいに応じて、こういった「分析的な聴き取り」をさせることももちろん大切ですが、楽曲の「全体的に聴き取り」をさせ、じっくりと音楽に浸らせることも必要です。ねらいに応じて、両者をバランスよく組み合わせて聴かせるようにしましょう。
　なお、音楽を形づくっている要素の働きが生み出すよさや面白さを、音楽を聴かせる前に、もしくは、聴かせて感じ取らせる前に、教師が言葉で説明してしまう場合があります。これは、意味のないことです。例えば、「**この楽曲の最初の部分は、弦楽器がフォルテッシモで低音で合奏することによって、恐ろしさを表しているのですよ。**作曲者は、恐ろしい王様をイメージして作曲したのです。」と説明しているこの内容こそ、児童が実際にその音楽を聴いて、聴き取り、感じ取るべき内容であり、学習のねらいそのものです。教師はこれを言葉で説明してしまうのではなく、音楽を聴かせて、音から聴き取らせ、感じ取らせるように様々な手立てを行っていくことが鑑賞の授業です。この点を十分配慮しましょう。

## 児童一人一人のよい点や成長の状況などを積極的に評価し、指導に生かしましょう。とは

　音楽活動を行っていく中で、児童一人一人のよい点や成長の状況を評価することはとても大切です。音楽という教科の特性として、音楽を創り上げていく活動を、グループまたはパートで、さらには学級全体で行うことがあります。その過程で、その児童なりのよさや個性を発揮して協同する喜びを味わいながら音楽活動を進めることができている場合など、それを評価し称賛しましょう。そうすることで、ねらいにせまるための活動がさらに活性化することにもなります。

　題材や本時のねらいを達成できたかどうかは、「目標に準拠した評価の規準」で評価しますが、その一方で、児童一人一人の成長を積極的に評価し指導に生かすことが大切です。
　例えば、「この児童は、前の題材では音楽表現の創意工夫が C と判断せざるを得ない状況だったけれど、今回の題材では、もう少しで B と評価できるようになるまでのびた（成長した）。」といった場合、教師は、「よくがんばったね。」と努力を認め励ますとともに、指導方法を工夫して、この題材が終わるまでにはこの児童を B と評価できるように指導していくことが大切だという意識を持ちましょう。

　次回は、中学校の努力事項『小・中学校9年間の目標及び内容の系統性を踏まえ、連続性を考慮し、各領域及び各分野がバランスよく配置された年間指導計画を作成しましょう。』について考えてみます。
　11月29日（金）頃アップする予定です。